

# 2022年度 Let's びぎんプロジェクト 活動報告書

No.	プロジェクト名	掲載頁
1	シカから生態系を守れ！～「最後の砦」の草原を後世へ～	1-6

# 2022年度 Let's びぎんプロジェクト

## 最終報告書

プロジェクト名：シカから生態系を守れ！

～「最後の砦」の草原を後世へ～

< 報告書記載事項 >

1. 構成員氏名・学部・学科（課程）・学年

No.	氏名	学部学科等	学年	備考（役職等）
1	宮澤 優輔	農学部・森林科学科	3	代表
2	池内 陽	農学部・森林科学科	2	副代表
3	小南 雪乃	農学部・植物生命科学科	2	広報
4	桑名 航生	農学部・植物生命科学科	2	会計
5	相川ゆきえ	農学部・森林科学科	3	
6	秋葉陽介	農学部・植物生命科学科	2	
7	工藤聡道	農学部・植物生命科学科	2	
8	鈴木璃子	農学部・植物生命科学科	2	
9	猪内優花子	農学部・植物生命科学科	2	
10	江縁紗耶	農学部・森林科学科	2	
11	松岡龍之介	農学部・食料生産環境学科	2	
12	長門岳	農学部・森林科学科	1	
13	石塚龍太	理工学部・社会基盤環境工学コース	1	
14	野田妃菜子	農学部・食料生産環境学科	1	
15	二ツ森ひなた	農学部・食料生産環境学科	1	

2. 活動目的

近年生物多様性に対する理解が高まっており、生物多様性条約や生物多様性国家戦略など政策面でも生物多様性の保全が重要視されている。一方で昨今の少子高齢化による地方の人口減少やそれに伴う税収の減少・社会保障費の拡大により里山や草原など人為的な攪乱で維持されてきた。

岩手県においても北上山地では半自然草原が広がっていたが、人工の牧草地への転換や管理放棄などで草原に依存していた生態系は減少し、現在では本企画の対象地である草原 A などわずかのみとなった。その草原 A も遷移が進行していたが 2012 年からの保全活動により貴重な草原の生態系が維持されてきた。

しかし京都大学芦生演習林の事例のように全国的にシカによる食害被害が広く起こっている。岩手県も例外ではなく、2021 年秋に草原 A でもシカの食痕が確認され、オミナエシが食害によって一部しか開花しなかった。何も対策しなければ数年で草原に依存する植物種が消失し、草原の生物多様性が喪失する可能性があった。一方で保全活動の主体であった

NPO 法人日本チョウ類保全協会や草原の土地所有者である岩泉町は費用や労力などの問題からシカの柵を設置する見通しが立てられていなかった。

そこで今回、草原へのシカの侵入を防ぐ方法として市販の電気柵を設置し、これによって草原の生態系をシカの食害から守り草原の生物多様性の保全を目的とした。

※今回対象とした草原はオミナエシ（岩手県レッドデータブック C ランク）を始め、環境省の絶滅危惧種やいわてレッドデータブックに指定されている種など、希少な植物種が生息している。生息地保護のため、第三者による無許可の侵入や盗掘等の防止の観点から仮に「草原 A」とこの文書内では呼ぶこととしている。

### 3. 活動の経過・内容

#### 3-1. 活動の内容

##### ① 設置の許可申請・確認

電気柵の設置対象地である草原 A は県の指定地域内であり、岩泉町の土地所有者であるため、県に対しては工作物の設置許可の申請書類を作成し提出した。岩泉町に対しては担当部署の方に実施の内容を説明し、了承を得た。なおいずれも保全活動に関わっていた日本チョウ類保全協会の永幡嘉之氏に、申請書類の作成指導や岩泉町とのコンタクトにご協力頂いた。

##### ② 電気柵の購入

電気柵は本企画の立案以前から目を付けていた商品の販売店を調べ、見積もりを立てた。その後学生支援課に注文の依頼を行った。

##### ③ 電気柵の設置・撤去

申請書類に記した設置範囲を確認し、設置の障害となる草木を刈り払い、設置した。なお、設置の指導には岩手大学の青井俊樹名誉教授にご指導いただいた。

また冬季の雪害対策として 10 月に電気柵を一度撤去し、岩泉町の管理小屋の方で預かって頂いた。

##### ④ 活動内容の展示（不来方祭）

活動の目的や内容、経過等を記したポスターで展示を行った。

#### 3-2. 活動の経過

7月中旬～下旬：申請書類の作成、設置の確認、設置範囲の視察、電気柵の購入手配

8月：電気柵の設置

10月上旬～中旬：電気柵の撤去、不来方祭で展示

### 3-3. 経費の使用状況

認められた 50 万円の内、計 402,353 円を使用した。内訳としては以下の通りである。

物品名	個数	金額 (円)
電気さく本器	1	78,000
電気さく本器用支柱	1	4,300
支柱	245	142,100
フック (柵線を引っかける部品)	1210	78,650
電気さく線(500m)	8	53,200
検電器	1	2,450
ゲート部品	5	4,275
巻取器	1	2,800
(消費税)		36,578
<b>合計</b>		<b>402,353</b>

## 4. 結果報告

### ① 設置の許可申請・確認

問題なく申請が通り、許可が下りた。また岩泉町からの了承もとりました。

### ② 電気柵の購入

問題なく購入出来た。現地への配達も依頼し、準備できた。

### ③ 電気柵の設置・撤去

8 月上旬から設置のための草木の刈り払いを開始し、途中電気柵設置を開始、8 月中旬に全域の設置を完了した。10 月上旬の秋の草刈り作業に合わせて電気柵を撤去した。

### ④ 不來方祭の展示

大学会館の一室を借りて展示を行った。

### ・総括

最大の目標であった「シカの侵入を防ぐための電気柵設置」は達成できた。限られた時間内であったがやり遂げた。特に悪天候時や炎天下で体力が消耗しやすい環境下で設置完了できた点は評価できると考える。主観ではあったが設置前時点で食害が確認された一方、昨年度シカの食害に遭っていたオミナエシも昨年度と同程度 (もしくはそれ以上) に開花数が残されていた。

一方で企画書には記載していた「電気柵の効果の検証のための調査」が時間や人手の都合上実施できなかった。不來方祭の展示においても見に来た人数をカウントするなどを行わなかったため全体として数値として残せなかった点が課題であった。

## 5. 今後の活動予定

来年度以降も電気柵の設置を継続して行う。今回の企画では企画書通りに調査が行えなかったが、来年度以降は草原 A の生物多様性の高さを示すためにも実施が必要であろう。本企画以前の保全活動においても正確な情報が蓄積されているわけではないため、来年度以降ある程度簡易な調査であったとしても有効であるように考える。

また SNS や学内の掲示板などを活用して、活動に対する学内の関心を高める必要がある。継続的な活動のためには、関係人口の拡大が必須である。実際の活動への参加だけでなく後援が得られる可能性を生むためにも、こうした地道な広報活動で関心を抱く人の増加が不可欠である。

今後少子高齢化や環境保全の予算の縮小によって人為的な攪乱で維持されてきた生態系はさらに減少する可能性が大きい。そうした時勢の中でこの草原 A が本企画を出発点として保全活動が受け継がれ、後世へその生態系の価値が残されることに期待する。

## 謝辞

電気柵の設置についてご了承頂いた岩泉町役場の担当者様、現場の活動においてご協力頂きました岩手大学の青井俊樹先生、岩手県立大学の泉桂子先生、新井隆介様、本企画の全体を通してご助言頂いた永幡嘉之様に感謝申し上げます。また本企画の立案、許可の申請、現場の活動等でご協力頂いたその他関係者にも感謝申し上げます。

## 6. 活動写真



電気柵の設置作業の様子（2022年8月15日 奥：泉桂子先生）



設置が完了した電気柵の一部分（2022年8月21日）



不来方祭における展示の様子（2022年10月16日）